天文研究

第256號（第 22 巻）　（昭和17年）　第 10 號

卷頭　隨筆

改暦，天文新語など

Calendars, New Terms, etc.

山本一清　*Issei Yamamoto.*

天文學の對象である天體は，（隕星を除けば，）全部，皆，世界共有のものであるから，之を研究するには，常に世界の學者と共に勉め勵む心が無ければならない．從つて，あらゆる問題について，世界の學者と通信し，文通し，會議し，討論することが必要である．しかしながら，用語の問題だけは，要するに各國の國内問題であるから，外國の人々に氣兼ねすることは無用である．

今日，天文學に關する一般的の問題も實に夥しいのであるが，その中で，(1) 改暦の問題と，(2) 用語の問題とは，何れも大切なことで，それぞれの立場から，學者も俗者も，關心の的となつてゐる．しかしながら，上述の原則から見ても判るやうに，改暦の問題は全世界共通の問題であるが故に，是非國際會議に於いて決議しなければものにならないことである．故に，之は現今の大戰亂が終るのを待つて會議を開き，實行へ進まなければならない．この戰亂のどさくさ紛れに便乘して姑息な改暦を行ふことは，世界を混亂に導くことと同じであるから，世の識者は注意しなければならない．尚，一般に，ものを改めやうとする論者は，とかく“改める”といふことにのみ急で，改めない前の“現狀”の美點を見ることを嫌ひ，之れを成るべく悪く見る傾向がある．從つて，心が公平でない．現に，今のグレゴリオ暦にも若干の美點があるが，中にも，現に全世界人が之れを使用してゐるといふ事實を正視しなければならない．今後，いくら良い暦が作られても，世界の一部分にしか實行されないものならば，それは現行のグレゴリオ暦に劣るものであること明白である．三百餘年前にユリウス暦が廢止されたのに拘らず，例へば，天文研究の或る方面では，依然として此のユリウス暦が利用されてゐる事實を見ても，“改暦”といふことは，成るべくは行はないのが宜いのであり，若し，行るならば，全世界人が一人残らず之れを實行する氣運を作らなければ，無意味であることを，重ねて述べて置く．かの1925年頭に“天文時制”を改めた一事でさへ，天文學界の一部

に，如何に迷惑を與へて居るかを考へて見るが宜い．

用語の問題は，國際性を有たない．殊に，我が國内に於いて，目下，各方面から國語や國文の改善が叫ばれてゐる時であるから，日本の天文用語といふものも，再三檢討して，早く妥當なものが生れるやうにしたいと思ふ．只，この場合に，せまい意味の天文學の專門家に委せることは不可である．いつも言ふ如く，專門家といふものは，馬車馬であり，井底の蛙であり，不具者であり，判斷力の欠格者である．どうしても之は，優秀なるアマチュアと，國語學者と，文筆家，天文以外の學者等を加へて，檢討されなければならぬ．

尙，天文用語の問題については，

A) 現在同一の原語に幾つかの譯語が用ゐられてゐることを統一すること

B) なるべく漢語を避け，耳で聽いて判る言葉を定めること

C) 必ずしも純日本語に囚はれず，ラテン語などから出た世界の共通語は，日本でも採用すること

等を考慮しなければならないのは勿論であるし，又，大東亞の盟主として世界に君臨する我が國の文化的氣運のためにも．

D) 星座名の中に，日本式なものを採用して，外國にも用ゐさせるぐらゐ有力なものとすること

E) 月面にも，日本名を若干使用すること

など，考へて見るべきではないかと思ふ．

星座の名は，ギリシヤ以來の歷史を調査して見ても，ずいぶん氣まぐれや，茶目氣のものがあり，全部が，ギリシヤ乃至近代歐洲人の專横に委せられたまゝであつた．しかし今後は，“世界文化”は歐米人だけのものではないのだから，吾々東洋人としても，多くの言ひ分を主張して宜いと思ふ．尤も，ギリシヤ神話に直接關連するトレミの48星座だけは，姑く手をつけない方が紳士的かも知れない．しかし，古典と關係の無い“近代星座”についてはナンセンスのものが少なくない．Apus(鳳鳥）だとか，Caelum(彫刻具）だとか，Sculptor(彫刻室)だとか，Indus(インデヤン）だとか，Mensa(平山）だとか，Musca(蠅)だとか，Pictor(畫架け）だとか，Tucana(トウカン鳥）だとか，Volans(飛魚）だとか言ふ星座を，今日の吾々が後生大事と保存しなければならぬ理由が，何所にあるか?! せめて，こんな名の代りに，“飛行機”だとか，“ラヂオ”だとか，“潛水艦”だとかを，新しい星座の名に繰り入れることは，二三百年前に，新文明の利器に對する非常な感激を以つて Telescopium（望遠鏡）や，Antlia（空氣ポンプ）や，Sextans（六分儀）や，Horologium（時計）や，Reticulum（レチクル）を，當時の人々が星座に採り入れた先例に習ふわけであつて，今二十世紀の文化を後世に誇るよすがにも成るだろう．また，“富

士山”や，“奈良の大佛”や，支那の“萬里の長城”などは，東亞にあるけれど，今や全く世界の名所なのだから，これ等を新しい星座名として用ゐることは，新時代を永久に紀念するものであろう．

個々の星の名だつて，何時までも，ほとんど，無意味なアラビヤ名を或る程度まで整理して，東洋の名を少しは採用したら如何なものか？　幸ひにして，センタウル座のア星や，ベ星や，十字架座の主な星々は，固有名が無いのであるから，先づ此等に對して適當な名を與へ，外國の學者にも之を用ゐさせるやう努力するが宜いと思ふ．センタウルや十字架の星座は，日本內地からは殆んど見えないので，今までは緣の淡いものだつたが，大東亞時代に入つて，我が國の威力は赤道以南にも廣まり，此等の星々は，言はゞ，“吾等の星”になつて了つたのである．この曠古の記念に，こうした無名の一等星に，名を與へることも，意義あることと思ふ．

一般の天文用語を，耳でわかる日本語として新たに定めることも，非常に大切である．既に今用ゐてゐる言葉の中でも，月(つき)や．星(ほし)や，曆(こよみ)や，時(とき)などは，そのまゝで宜いのだし，又，彗星(ほうきぼし)，流星(ながれぼし)，日(ひ)，三日月(みかづき)，日出(ひので)，日沒(ひのいり)，滿潮(みちしほ)，干潮(ひしほ)などの俗語は此のまゝ學術語として用ゐて，少しも差支へない．尙，日月蝕のためには“はえ”といふ良い古語があるのだし，水星，金星，火星，木星など，語學者に言はせれば，古い日本語もあるだろうと思ふけれど，しかし，餘りに現代離れしたものや，全くの死語を再生せしめるのも困難だろうから，むしろ，思ひ切つて，多少の異論はあつても，水星(みづぼし)，金星(かねぼし)，火星(ひぼし)，木星(きぼし)，土星(つちぼし)と呼ぶことにすれば，すべての人が，今更らしく古い國文國語を再習しないで濟むわけである．我々の先祖は，支那の十干十二支を輸入したとき，甲(きのえ)，乙(きのと)，丙(ひのえ)，丁(ひのと)などといふ日本式の言葉を作つた先例もあるのだから．

緯度，經度，赤道，黃道，子午線，地平線，日週運行，年週運行，順行，逆行，停留，赤經，赤緯，光線屈折，遊星，恒星，連星，變星，星霧，星團，視差，固有運動，會合，對衝，軌道，引力，楕圓，拋物線，双曲線等々，これ等は皆，何とか良い日本語に改めなければならない．實に大事業である．しかし，戰鬪に從事してゐる皇軍將士の意氣に習つて，奮つて此の難局に當るだけの心掛けが欲しいものである．——こうした問題について，いつも思ひ出されるのは，ドイツ語の學術用語である．フランスや英國あたりではラテン語系統の言葉が學術用語に多く用ゐられるが，ドイツでは成るべくドイツ生粹の言葉が用ゐられる．緯度は Breite（日本語に直譯すれば，はゞ），經度は Länge（ながさ），赤經は Gerade Aufsteigung（正しい上昇），赤緯は Abweichung（偏り），望遠鏡は Fernrohr（遠筒），子午線は Mittagslinie（正午線）と言つたようなわけである．

日本語には語數（語彙）が少いといふ人があるけれど，自分は決して左様に思はない．日本語にも澤山の良い言葉はある．ドイツ流に研究し，工夫すれば，日本語にも充分な語數があると思ふ．例へば，光線が屈曲するといふ意味の言葉に，英語（ドイツ語）で言へば，Refraction (Lichtbrechung), Diffraction (Beugung), Deviation (Abweichung), Aberration (Aberration) 等いろ々々のものがあるが，日本語にも，“まがる”，“折れる”，“偏る”，“外れる”等々の言葉がある．故に，これ等のものの中から適當なものを原語の譯名として選定すれば宜いのである．

試みに，少し詳しい辭書などをあさつて見ると，“星會ひ”といふ言葉がある．之れは天文用語の“會合” Conjunction の新譯語として適當なものである．又，“星石”“星屑”“星くそ”などといふ日本語は“隕星”と同じ意味のものである．又，“星原”といふのがあるが，之は星野 Star-field の譯名として用ゐて宜い．“星下り”は流星雨 Meteoric-Shower の意味に，昔から用ゐられてゐて，今の吾々が用ゐても，少しも耳さわりではない良い言葉である．

自分は，星座を“星繪”(ドイツでは Sternbild)，天球を“ひさかた”(縹形，卽ち球形の意)，恒星を“つねぼし”，遊星を“旅星”，衛星を“ともぼし”，天文臺を“星見臺”，伴星を“つれぼし”などといふ風に言ひ換へたいと考へてゐる．順行や逆行は“行き”と“戻り”で宜いと思ふ．ループ Loop は“輪”で宜い．楕圓は“いびつ”といふ良い日本語が昔からある．レンズは“レンズ”でも“玉”でも宜い．對物レンズは“向ふ玉”で宜いと思ふ．向島だとか，向川（武庫川）だとかいふ地名が日本語として存在する．元來“むこう”といふ言葉は“對立”といふ意味もあるのだから，對衝の代りに“向き合ひ”と言つても宜いと思はれる．

新しい天文用語は，日本文が將來カナモジや，Roma-zi に書き直される場合にも，不便のないやうなものを，今から準備して置くことが肝要である．

世界各國共通の語原のもの，例へば視差 (Parallax)だとか，黃道 (Ecliptic)だとか，Aberration だとか，歲差 (Precession)だとか，極 (Pole)だとか言つたやうなものは，むしろ我が國だけが術語を特別に作らないで，“パララクス”，“エクリプチク”，“アベラシオン”，“プレセシオン”，“ポール”などと，姑くは片カナで書いても宜いと思ふ．既に，寫眞家などは，“視差”と言はないで，“パララクス”といふ言葉を，現に用ゐてゐる．どうしても，こんなになる傾向が自然なのだらう．

星座の名などは，既に90％まで，耳で聽いてわかる日本語になつてゐる．いよ々々本氣になつて研究して見れば，新用語の選定は大して困難なものではないやうに思はれる．たゞ，自分は今“天文學”といふ言葉の代りに良いものが思ひ付かないので，途方に暮れてゐる．（終）